

の届いた病人もあつた。こ見えて差引勘定、善悪がないに困る。こいふ、つまり禮を取つて殺人をして現世の法律にも觸れず來世の地獄へも落ちない相手だ、然るに世の中の大馬鹿もの、天下湧き物の金銭を惜しんで此怖しい相手の選擇を粗略にする奴がある、つい手近で便利で萬事お手軽で卍辭愛嬌のあるだけで、生殺與奪の權を其醫者に預ける。こは愚劣魯鈍これより甚だしきはない昔の談話ではあるが、ある藪醫の家へ七人の強盜が押し込んだ、する。こ其藪醫殿が一本の匙を眞向に振り上げて飛び出したので、やアあの匙先に掛つて助かつたものはないぞ。こ、流石の強盜も一目散に遁け出した。こいふ、

これほご怖しい醫者を、いくら下手でも免許のある以上、まさか賣藥より效能のない事はあるまい。こ、かういふ料簡で自己が身體の生死より眼前の錢勘定で安直に迎へる奴が多い、此奴等が正しく一思案に掛る奴で、つまり一文惜しみの百知らず、必要。こ快樂。こを合はした旅

の恥を搔き捨て。稱して、宿屋飯の喰ひ遁けも仕兼ねない徒輩である、

惜しいこと情夫を亭主にして仕舞ひ

さア出た、いよく大變なのが出た、惜しい。こ情夫を亭主にして仕舞ひ、これは世間普通の男女、わけて青年妙齡の男女は、あまり委しく知らない方が宜い、この皮肉な警句を一讀の下に忽ち會得して、奇。こ呼び快。こ叫び、おもはず小膝を打つて歎稱するやうでは、其人の行末お爲に取つて宜しくない、甚だ掛念である、實は抹殺したい考であつたが、さて秀逸も秀逸、こ。こまで心憎い垢のぬけた腹めぐりの秀逸に出逢うては、いかにも捨てられない、いかにも揉み潰せない、何。こしても反故にする事が惜しくて堪らない、敵ながら天晴れ武者振。こは斯る類である、

そもく女より男をイロミかマブミか呼ぶ以上、いふまでもなく花柳狭斜の出来事で、『簪は素人の使ふ簪でなし』つまり簪の脚を使ひ馴れたものさへば、他をいふに及ばない、また『簪も逆手に持てば怖い』この簪を逆手に持って、をりく交情が好過ぎた互の遠慮なさに癡話喧嘩するものさ見れば、その境涯ご心意氣の如何なるものであるかは、仔細に語らずとももの事、いはゆる親兄弟に見放され無縁の他人ご他人ごか味な縁から搦み合つて、今更ら退くに退かれぬ粹に身を喰はれた奴である、もし斯る事を以て人生の快美ごにありごする遊冶郎の眼より見れば、羨望の極、地踏鞴を踏んで、畜生々々ごいはれる奴である、ごころで此秀句は歌妓娼婦いづれにも通じるが、まづごには女を藝妓ごして、加之も脚下の軽い顛び易い、吹けば飛ぶやうな薄ッぺらな藝妓でなく、その中の第一流に位する尤物ごして置いて、年頃は二十七八、するだけの事を仕ぬいて酸いも甘いも舐め盡した果で、また

男は一見ちよいご野暮のやうに見えながら、實は氣の利いた萬事を心得て根性骨の強い滋味のある男で、この藝妓にさへ此處まで見込まねば世の中へ出ても随分、何ごか用られる筈の男、いはゆる春畫草紙の殿様めいた白の優形でなく、ごごやら一癖ごごした凄味のあつた男振で、我しらず自然に女殺しの本性を備へた奴、女の方よりいへば嚙み占めて味の出る男、まづ年輩を三十以上、五までの間ご仕て置かう、まだ前の見えない駈け出しの青二歳ご、まだ臀部に卵子の殻の取れない端た藝妓ごが、たゞ一時の室に咲いた空花のやうな浮氣沙汰ならば、その情を繼續すべき金がなくなるごか、已むを得ない境遇に制せらるごごか、ちよいご他人に水を注されても忽ち氣心が變つて嫌にもなり別れもするが、つまり苦勞人ごもいふべき件の男ご女ごが、何事も覺悟の前で斯うなるを承知の上で斯うなつた曉、水を注さうが火の粉を浴びせやうが無効だ、迎も他より動かせ

るもんでない、うか／＼すれば他人を意見するほどの勢ひで、この男女が宜い手本だ、汝な
ンか夢にも眞似を仕ちやアいけないよ、なごさいふ奴である、
無論熱し易きものは冷め易き理の反対で、かういふのは却つて最初から狂氣のやうに熱して
騒いだのではない、『戀でなし情夫で猶なし只何ごやら、人が取るかご氣に掛る』あまり惚れ
ても居ないが、たゞ何ごなく人に取りられるのが残念のやうな心地するごいふ、全體この何ご
なく氣に掛るごいふ奴が頗る他日に何ごある因果附の奴で、凡そ男女の情に於ては最も恐る
べき初步である、『合性は聞きたし年は祕したし』そろ／＼この邊より迷ひ込んで、果は身も
骨も一體になるほどの深入り、『この痘痕みつけなだご交情のよさ』もはや互に美男美女ご
いふが如き戀に於ける普通の觀念を通り越して、一種無治の病的ごなつて居る、つまり眼が
好いごか鼻が美しいごか金があるごかいふのは、その眼に優り其鼻に勝る他の美に出逢うて動

くの恐れあり、第一この金で出来る奴は其金の多少に依つて進退し、有無に依つて存亡する
の結果、戀も情も殆ど賣買物になるが、儲ごこに特長もなく只これ何ごなく惚れ込んだ奴の
次第に發達して絶頂はいはゆる佛語の不惜身命一心不動、氣が付いて諦める時機がない、
また世間普通の戀ごいひ情ごいふもの、その目的は偕老同穴の諺を事實にしたいためで、忍ぶ
戀を忍ばず晴れて夫婦ごなり、憚る情を憚らず、共に棲んで添ひ遂げるごいふのが目的であ
る、しかし以上ごまで深くなつた男女の關係は、寧ろ其間の苦勞が無上の快樂で、世間に
笑はれ人に譏られ、互の境涯に辛い切ない事があればあるだけ猶更の快樂、ごごに深くもな
り、面白くもなり、いふにはいはれね情緒纏綿、いよく／＼浮世の道理ご奮闘する氣になる、
『諦められぬご諦めた』これは市井巷間の俗諺ながら、かういふ男女の關係に當てて見れば、
實に學者の千萬言よりも遺憾なく適切に其情の神髓を解剖して居る、

そもく情死を獻身的の愛の極として、戀の情も一切こゝに最後の念を含める如く讚美する人もあるが、まだ浅い、机の前で書物の中から拾ひ集めた空漠な理想を團子細工にしたくらゐでまだ喉が黄色だ、その時の世態人情も辨へず古人の心中物でも讀んで、自己の浅薄な實地の一端より割り出したくらゐの事であらう、勿論、情死すべき事情と境遇の厚薄深淺もあり、情死する奴の意志に於て強弱の程度もあるが、つまり現世で添はれず來世で云々とは、その戀と情の未だ窮極に達せざる幼穉の小兒が過つて井戸へ落ち込む一船、何の議論も絲瓜もあるもんか、第一その證據には情死を仕損ねて助かつた奴に、まづ添ひ遂げたものは殆ど事實に對し、戀の情に獻身的の死を賭したほどの奴、たまく無事に生き残つて忽ち路傍の人となる理由がない、ない筈が事實に於て多いから、元來この情死なるものは愛の情の極度でなく、冷め易い愛の情の熱した時に發する狂ひ咲で、戀の本體を失ひ時候に外れ

た枝の空花である。

こゝろで『惜しいこゝろ情夫を亭主にして仕舞ひ』なんだつまらない、こんな事なら馬鹿々々しい、あくも苦勞するんではなかつた、いよく晴れて亭主に持つて見れば、儲さほごに面白くも呵しくも何ごもない、惜しい事をして仕舞つたごは、こゝが所謂斯ういふ男女の目的を達した後の事實で、その間の辛い切ない苦しい事情で情死するやうな軽い易い淺薄な愛の情ではない、『惜しいこゝろ情夫を亭主にして仕舞ひ』この事實があつてこそいかなる艱難辛苦を経て來ても、首尾よく目的を達し得たので、惜しい事をしたごいふ、添はれぬ昔を顧みて添うた今を嬉しいごも有難いごも心得ぬごころが、即ち戀の情の極度である、しかし以上は斯うなるべき筈の境遇より、斯うなり終せた戀の情の極度を示したので、その境遇でなく、其事情の必要もない、世間一般の男女が、夫婦なるべき目的のために入らざ

る苦勞を仕てはいけない、たゞ無事息災に添ひ遂ぐべきが戀の當然である、そもく戀
の情を果すがために艱難辛苦に堪ふるは男女の道に於ける不吉不幸の變態である、まして
や情死などは怠惰者の餓死するに一般、戀の悲哀でなく、情の果でもない、

『惜しいこゝ情夫を亭主にして仕舞ひ』川柳としての秀逸奇警、殆ど此句の外にないほどの
趣味はあるが、偕この句の正反對に男女その戀の情を圓滿無垢に遂げてこそ、人間の本來
こもいふべきである、

つまり男女の關係に付いて波瀾多き小説の産み出さるゝやうな愛の情は、人道の事實に於
て半文の價値もない、爲永春水の梅曆を廂髪ミハイカラに焼き直した小説類を隨喜渴仰の同
情で讀むやうな男女は、墮落の極、わるくするに情死を仕損ねたり、また此句の心を仕出來
し損うたりする奴である、

○日本の虎は異國で鬼といひ

○入婿は去狀書いて追ひ出され

○三毛猫は雷の子の襦袢なり

○解せぬもの細根大根廣小路

○黒犬を提灯にする雪の道

○千客萬來みな來ると困るなり

○あまたの唐人きこえませぬと泣き

○西行も野郎の時は北を向き

○天に川あるはず地にも雲の上

- 子のものを親の借れぬは嫁ばかり
- その右に出づるものなし甚五郎
- 炭團の看板天晴な無筆書き
- その後は糖味噌和尚ばかり出来
- 蛤は實を入れ替へて高くなり
- 同日の論は駿河と近江なり
- 通りぬけ無用で通りぬけが知れ
- 衣川さい槌ばかり流れけり
- 四角でも炬燵は野暮なものでなし

別段これといふ趣味もなく風韻もなく、また文辭の艶も意匠も淺薄で面白くないが、きけば其通りで、なるほごいふ川柳のうちの小理窟を十八句こゝに並べて見た、勿論、たゞ單に讀者への一興を添へたばかりである、

『日本の虎は異國で鬼といひ』日本に虎はない、その虎を異國で鬼と恐れしたのは、文祿の朝鮮征伐に鬼將軍の名を轟かした加藤清正、幼名は虎の助である、

『入婿は去狀書いて追ひ出され』女房に去狀を書いて叩き出すのが世間普通で、その去狀かいて自己が叩き出されるは、なるほご婿養子の無念さ、心魂に徹して婿は出る氣なり』よくくくの事であるらしい、

『三毛猫は雷の子の襦袢なり』雷の犢鼻褌を虎の虎とすれば、虎に類した三毛猫の皮は、其子の襦袢になる筈で、『猿の子は芝居の夢を喰ひたがり』この筆法である、

「解せぬちの細根大根小路」細根を大根といひ廣い道を小路さはいかにも解せぬ事である、
「黒犬を提灯にする雪の道」四方まツ白な雪道には黒犬が提灯代用になる筈、「たぎんやの女
房の顔は白く見え」この正反對である、

「千客萬來みな來るに困るなり」千客萬來なごき書いてあるは、必ず下等の小料理屋か、田
舎の手狭い旅籠屋に限る、そこへ讀んで字の如く千客萬來に押し寄せられては困るごころか
踏み潰される筈である、

「あまたの唐人きこえませぬ泣き」京都大佛にある耳塚、豊太閣征韓の役に敵の耳ばかり
を埋めたごころ、そこで耳を取られた數多の唐人きこえませぬ泣きの愚癡をいふ、しか
しまだ反對に「異國まで聞ゆる耳の塚を築き」こいふのもある、

「西行も野郎の時は北を向き」西へ行くに書いた西行法師も、いまだ世を捨てざる時は禁裡

北面の武士で、佐藤憲清、いかにも北向である、これは北の字を北廓といふ通言の吉原に當
て、無常を感じて西方彌陀を本願とする西行法師も、むかし坊主頭に毛のあつた時は戀こ
女に云々こも解釋される、

「天に川あるはず地にも雲の上」銀河の事で、天に川もある筈、地にも雲の上人がある、ま
た「下から川へ指をさす秋の空」こいふ句もある、

「子のものを親の借れぬは嫁ばかり」親として我子のものを自由に借れぬは、なるほご子息
の嫁である、しかし世の中には「ミンだ嫁息子も産めば孫も産み」かういふ不倫至極の奴も
ある、

「その右に出づるものなし甚五郎」名匠の左甚五郎が死して以來、その右に出るものはない、
「炭團屋の看板天晴な無筆書き」まッ黒い丸い炭團屋の看板、なるほご天晴な無筆も立派に

書ける、

「その後は糠味噌和尚ばかり出来」澤庵和尚の死後は、只これ臭い糠味噌和尚ばかりである、
「蛤は實を入れ替へて高くなり」膏藥に限らず、凡そ蛤の殻を磨いて入れ替へる品は、いづれも元來の實よりは高く賣れる筈である、

「同日の論は駿河近江なり」富士山琵琶湖「近江から一夜に嫁入る綿帽子」こいふものもある、また「孝靈の一夜のうちに大仕事」いづれも同日の論である、

「通りぬけ無用で通りぬけが知れ」他の無用を書いたところを自己の便利を近道に通るぬける奴、ちこ横著ではあるが、世間これに類した事實、いろいろの點にある、

「衣川さい槌ばかり流れけり」武藏坊辨慶は義經に従うて奥州へ落ち伸び、秀衡の館で討死したこある、しかし其時に背負つて居た例の七つ道具は皆これ銅類で、只さい槌ばかり木だ

から衣川へ流れたこいふ理窟、この辨慶は頗る川柳子に用ゐられる、辨慶こ小町出雲の割り餘し」また「よくくの事辨慶も珠數を出し」

「四角でも炬燵は野暮なものでなし」人に角のあるを野暮さいひ、浮世に捲れて角の取れた丸いのを通さいふ、この點から來たので、無論俗中の俗ではあるが、「見なましな四角さますこ玉子焼」いはゆる此邊の消息を含んだ奴、また得て炬燵は道ならぬ戀の媒介にもなるこいふ下世話にも通はせて、四角でも野暮でないこの事、「間男を炬燵槽でぶちのめし」重ねて置いて四割にする刃物三昧よりも、怨恨の片割、その炬燵槽でぶちのめすこは呵しい、これを支那の事にして「間男は此柱だこ官女いひ」こ洒落れたのもある、

○將門は朕が不徳と減らず口

ひかれものゝ小唄こた一般へん、へらず口くちは負け惜しみの意味で、その人間にんげんが劣等れつとうなれば血迷ちまうた囁言ささや、未練みれんらしく見苦みぐるしく、いかにも賤いやしく聞えるが、また其人物そのじんぶつに依よつては、正まさに是れ一片鯁骨べんかうこつの不屈不撓ふくつふたうを現あらはした自信力じしんりきの痛快つうくわいなる壯語さうごも聞える、「去きつた去きつたさかいふけれさ逃げたなり」なアに叩たたき出したのさ、さいひながら實じつは女房にようぼうの方ほうから出たので、連れ添そふ女をんなに見下みさけられて逃げ出だされるやうな亭主ていしゆ殿どのでは、されほぎ立派りっぱな大口おほぐちを開あいて喚わめき散ちらしても無効だめだが、さて將門まさかどほぎの人物じんぶつになれば、たごひ反逆はんぎやくでも、滅亡めつぼうの曉あかつきでも猶なほその意志いしを枉かげず失うしなはず泰然たいぜんとして曰いはく、戦たたかひの罪つみにあらす時勢ときせきの然しからしむるにもあらず、これ朕ちんが不徳ふとくなり、朕ちんは凄すさまじい、不徳ふとくは猶なほ更さらら過言くわごん千萬せんばんだが、同じ負おなけ惜しみの減へらず口くちでも、斯かくの如ごとく

きは一種しゆの英雄いゆうの口吻こうふんとして後世こうせいにまで傳唱でんしやうされる、つまり出来できもしない奴やつが生意氣なまいきな御託ごたを吐つくなさいふ反省はんせいを促うながした寓意ぎである、この將門まさかどに付ついては、「純友じゆんゆうが來きて誘さそひ出す花はなの山やま」悪い友達わるいともだちが妻女さいぢよの手前てまへを花見はなみ誤魔化ごまかして誘さそひ出す浮世うきよの謀叛むはん沙汰さたにも使つかはれる、また「將門まさかどは崩くづしのきかぬ紋所もんじよ」また「放はなれ馬うまより騒さわがしい繋つなぎ馬うま」また「ぢやく馬うまに常陸ひたちの伯父おぢい御ごかみつかれ」いづれも相馬さうまさいふ文字もじに關聯くわんれんしての句くばかりで、朕ちんが不徳ふとくほぎ興味きんみ津々しんしんでない、

○奥方へ遺言はなし湊川

櫻井きくららの驛はきで我子わがこの正行まさゆきへ後事こうじを託たくした教訓けうくんさいひ、湊川みなとがはの最後さいごで我弟わがおとうに對ひかうて七生人間せいじんげんの語ことを發はつした外ほか、曾かつて楠公なんこうが最後さいごの奥方おくがたへ一言ひとことも殘のこしたさかいふ事ことがない、なるほぎ、「石いしになる

うき世の裏表

木は南朝の柱なり』いかにも言ひ盡して居る、それに引き替へて同じ南朝の新田義貞は、『官軍の總大將は朝寝なり』こいはれて居る、さらに際ぎく斬り込んで、『勾當の内侍鎧を引ツかくし』まだ貴方お早いに宜いぢやアありませんかね、じれつたいご勾當の内侍に出陣の鎧を隠されて、おめく大切の軍機を失したごは、聊か酷評なれご、楠公に對しての反照事實である、全體この新田家には女のために過るものがおほい、『ついでその穴に義興氣が付かず』そこはそこいふ要點の意味ご舟の底ごに通はせて、舟の底の穴に仕掛があつて乗せられた結果に溺れ死んだごは巧妙の極である、『生きながら新田弘誓の舟に乗り』また『鳥にだも如かざるべきご御討死』毒舌の警句である、

○凄い風小天狗枝に獅噛み付き

まづ天狗の本場いへば鞍馬の奥ご定まつてあるが、いづこに限らず深山幽谷の間で鬱蒼たる大杉の中より俄に凄じい物音でもすれば、忽ち天狗の業かご思はれる、その天狗中にも第一等の大天狗が勢ひに乗じて暴れ出す結果、あまり物凄じい大風を吹き起す時は小天狗おもはず大木の枝へ一所懸命に噛り付いて吹き飛ばされぬ用心するごいふ、また修行の足らぬ小天狗にせよ、天狗が風に驚いて木の枝へ噛り付くごは呵しい、

しかし天狗は鞍馬の奥ばかりが名物でない、今日この世の中の人間界には最も多い、加之も大天狗・中天狗、小天狗、木葉天狗、嘴天狗、甚だしいのは天狗の形さへ備はらず天狗がる奴もあつて、頻りに自己が鼻の頭を捻り伸ばす體、いかにも奇觀である、まして折角に引き伸ばした鼻ツ柱を、をりく狼狽へて物に突き當てながら、ほきりご脆く曲折るごころが猶更の奇觀である、また大杉の梢に濟まし込んで高く巢を構へた大天狗も、をりく足を踏み

外して大地へ轉け落ちる體、これは一入の滑稽で、まだ自在に通も得ない中天狗が無闇に空中を飛び歩く時、案外の鳩や鴉に糞を放ツかけられて一時に悄け返る體、頗る面白い、その他の木葉天狗も、天狗の類は所謂狗賓界の陣笠連で、實際の飛行力は片脚を撽ぎ取られた蟬にも及ばない、うかくすれば蟻の穴へ引き摺り込まれるといふ、あはれ至極の境涯である、いづれにしても人間で天狗名の付く奴、さうせ自己の本性を失うた魔物である、

○先生といはれてグツと反身かな

死んだ後で先生と呼ばるゝ人は、いはゆる棺を蓋うて論定まる理由でもなからうが、事實なか／＼豪い人物も多い、しかし現在の人で顔さへ見れば先生々々といはれる先生、これは比較的死んだ先生よりも頗る先生振が下るやうに思はれる、全體この先生なる文字は高尚なる

物質外の尊稱で、世に先んじて生るゝも解釋され、また子弟を教導する師範者の意味にも解釋されるが、中には先生の文字を兎も角も先づ此世に生きて居るだけの人といふ義に解釋される先生がある、先生といはれるほどの馬鹿でなし、甚だしいのは先生の二字を馬鹿の代名詞としてある、先生と呼んで灰吹捨てさせる、これでは先生いよく立行かない、わけて先生の上においといふ言葉を置いて、おい先生いへば侮辱の極になり、あの先生さか、例の先生さか、是また名譽の稱ではない、ところが今日の先生いづれも多くは皆たゞ先生でなく、その頭上へ何さか有難い呼出の聲をかけられる先生達で、つまり旦那いへば返答もせず御亭主いへば不満足な面をする人に對うてまさか宿六も此野郎も呼べない場合に己むを得ず用られる總稱らしい、或人曰く先生は世間しらすの雅號なりと、あゝ先生の價値また下落せる哉、

○自惚を退ければ外に惚れ人なし

なるほご人間おのく自惚を退けて見れば、儲めまり是こいふ確實な惚れ人のないもので、あの女が自己に迷うて居るさか氣があるさかいへご、なアに實は女の方よりも本人まづ自ら本人に惚れて居る理由で、加之も此ほれやうは他事でないから頗る無遠慮に烈しい、所謂我田引水の勝手な惚れやうで、第一その證據には世間の事實、鏡に對うて自己の醜男を自認する奴でも、無理に我心を慰むるに足るだけの點を見付け出すもので、つまり色が眞ツ黒で目尻が下ツて居るが齒は白くて眉毛が太く上ツて居るさか、頬骨が高く鼻は低いが口は尋常で耳朶が大きいさか、面が悪ければ姿が善いさか、やうく僅に強ひて其一個所を見出すや否、忽ち其一個所を眞向に振かざして天下いづれの女にも馳せ向ふ勢ひだから堪らない醜

男が入らざる年のかくし事、七歳や八歳を多くいうたところで利害のある面相か、相手は何とも感じないに、わざく年を秘して若く見せたいさは、なさない奴である、ひごりもの隣屋の娘うなされる「かういふ獨身者が壁一重の隣屋へ住み込む必す芳紀の娘は夜なく、魔される、加之も此奴この類の男は案外なかくの厚顔鐵面で、もし十人を覗うて一人に手應あれば一割に當るこいふ料簡で押し出すから、肱鐵砲の三發や五發を喰ツても平氣だ、おまけに一方では他に對うて、あの女も出來た、この女も出來た、いや今かういふ女があつて、義理にも捨てられないさか、恥かし氣もなく顔を撫で、吹聴する圖太さ、あツミ呆れ返る外はない、まづ一種の色情狂さもいふべきであるが、世間この病人が頗る多い、

○一女出世して九族うかむなり

一人出家して九族天に生ずこいふ諺、これは現在の事實に見えないが、一女出世して九族うかむなり、これは正しく世間の事實にある。『ねる家を娘ころんで引き起し』また『借金穴へ娘を埋めるなり』かういふ場合で、かういふ事をする親の身には、無論、男の子よりも女の子に限る。『仕度金きて掃溜を鶴は出る』掃溜に等しい貧民窟。『長屋中で金氣のあるは井戸ばかり』こゝに生れた容貌の美しい娘は、そこで其まゝ身を終る筈がない、必ず何處からか仕度金が湧いて来て、その掃溜を鶴が飛び立つやうに出るものである、いはゆる氏なうて玉の興、こゝろが玉の興に乗り終せて身の運を神妙に末の末まで保つものは妙い、多くは昔を忘れる本人の不埒か、但しは隴を得て蜀を望む親の不料簡か、いづれにしても身の程を知ら

ぬ我まゝご利慾ごの間違ひから、『還俗で九族天を追ひ出され』ご同じ結果、竟には元の掃溜に舞ひ戻つて、もはや其時は流石の鶴も瘦せ衰へた羽ぬけ鳥の哀れな境涯、身の仕度金は倍置いて、麥飯一ぱいの仕度料さへ湧いて来るものもなく、やはり掃溜に相應な皺くちや婆ごなる、つまり地に這ひ上つた河童も最後は水に終るの諺であらう、

- 天晴ごわたしがしたご白女命いひ
- 猿田彦あまの岩戸を現れかね
- 釋迦さまへなうご泣いてる涅槃像
- さし引は閻魔も困る醫者の罪

うき世の裏表

- 大佛のくさめ奈良中ヤレ早風
- 戀人に似た顔はなし羅漢堂
- 雷神の面は九曜の中の星
- 鳴神に臍を取られし原田甲斐

六一一

- 青砥の由來一文を拾ひ上げ
- 人にいふ意見を聞けば一人前
- くらやみで牛若早い業をする
- 村日傭人間わづか五十文
- 早乙女はかいゝ所が泥だらけ
- 白い手で田は植ゑられるものでなし
- いゝ容貌親は鳶にたこへられ
- 相の山人の情を撥で受け
- ふじ額むすぶ紙燃に赤くなり
- 歌のあぢ骨のあるほご和かし

- 極難儀くさいた跡で泣き出され
- あらかじめそれぞ知れかし嫁不快
- 気がついて嫁かんざしの鈴をぬき
- ふられた夜哀別離苦こ所化さこり
- おこがひで額の筆法はねて譽め
- 魔を除ける腰巾著に角だいし
- 寄らば切らむ勢ひで藥賣り
- 人おろか美人さいへき皮ひこへ
- 小人島不二山握り飯で出来
- 墨壺の絲で大工は針しごこ

- 禿あたま能き分別をさすり出し
- 己が罪おのれをせめる紙帳の尻
- 投げられて武勇を振ふ國言葉
- もう幾つあがるこ雜糞きゝ合せ
- 風のくるたびに隣りの林ほめ
- 年禮に通辭をつれるけし坊主
- 餅あみにひツかゝつてる下戸の禮
- 注連のうちわが女房にもちツミ惚れ
- はまぐりの出る迄まくる汐干がり
- 鶯を遁してやねの谷渡り

- かへりがけ急けばまはる風ぐるま
- 惜しさうにすみから挟む雛の重
- 紙雛も母のは腰がまがるなり
- 手が枯れてるので花は生きて見え
- つみ草のいれものにする下女が袖
- 花ぬす人あこから蝶が追ひかける
- 呑まぬやつ辨當くふこ花に飽き
- 鼻筋の背中へこぼるひき蛙
- 早乙女は二の腕でふく玉の汗
- 早乙女は子を寝かすにも田植歌

- ひなの内裏猫ぬえほごに嫁さわぎ
- 五月雨に下女あつくなる火うち箱
- 五月雨のむつきに困る鬼子母神
- 風鈴もだんまりで居る暑いこご
- 子の寝冷あくるひ夫婦喧嘩なり
- 子ばかりで夫のしれぬ鬼子母神
- 涼み臺また始った星の論
- 小便のあごで尻をひる安花火
- 魂棚のねすみ若後家さびあがり
- ふき降り人間をのむ蛇の目傘

- 夕立に甕ぬきでをきってかけ
- 初雪や使なんぎさ丁稚よみ
- 日々にもまた新なり米のめし
- 竹やりで腹えぐらるゝ米だはら
- 人なみに座頭の見るは夢ばかり
- 親に似た子を持つ座頭ふしあはせ
- 座頭の幽霊うろたへて晝出たり
- つんぼうが内にあるので紙がいり
- 手のひらへ書いてなの字は口でいひ
- 御詞歌で子を寝せつける木賃宿

- 良雄三祐成忠孝の遊女かひ
- 勝頼は茶わん今川をけて死に
- わが顔をまいにち磨くかゞみ砥ぎ
- 疊やのきざり箆笥を重くのけ
- 地踏鞆をふんで疊や糸をしめ
- 直な木を曲けてつかふは船大工
- 七りんも五りんも石工ほって居る
- 日が入る息子かうもり著て出かけ
- 巻紙もやせは苦界のもん日まへ
- 洗濯のたらひは嫁のちからもち

- しうご死に嫁かた腕をついだやう
- よめの冷汗姑の生きた夢
- はね炭におやぢのこごさ中だるみ
- 仲人は四海の浪をぐツミ呑み
- しらさぎが鴛鴦になる夜の羞かしさ
- よめ雪をまれば霞をむこがさり
- かるい産ばアさま後のまつりなり
- 其當座あさねのまへミ嫩られる
- 似せ首を舐ぶるが乳の呑み初め
- 慎みのよいは辨慶小町なり

- 中年に成ッて師直色氣づき
- よしなよこ下女おはぐろの脰でつき
- なりさがる瓢箪で身はなりあがり
- あくせく塗ッても後家は拭いて出る
- 男湯を女が覗く急な用
- さなきだに花よめ寝ごひ榮りなり
- 孔明はみかけの石で呉をかこひ
- 文三武の梅で武夫名がたかし
- むだッ火たきノ下女の面白さ
- はしたない事を言ふのでお末なり

- 主馬でさへ舞うたご静すめられ
- 白拍子旗色のいゝ方へ惚れ
- 母の來る度に妾はこかすなり
- 忍ぶにはち三松明は明るすぎ
- 引ばいで起すご下女はむふんなり
- いかなる夢や結ぶらん下女寝ごこ
- 鳴子ひきよくくみれば盲者なり
- 面見ればこたつの中の手がちがひ
- 田舎嫁かんがへもなく鬢を出し
- 人先に仕度のできる野暮むすめ

- 泊ッたら御免よご母を馬鹿にする
- 御新造郎だけ上げていごまごひ
- よく結ふご悪く云はれる後家の髪
- 獨りものめんだうがッて二升たき
- 睦言ごいふは高尾がいひはじめ
- 十兩へごぶく座頭てんをうち
- 挨拶をまじくご嫁きまたがり
- 四條河原では人の天ふら見世を出し
- 五右衛門が釜は七斗ご五合入り
- ばちぶくろ隠されて替者手をあはせ

- ひなの箱おこしたごこであけて見る
- あら世帯わけのつくまで雛はなし
- ほしい顔せまいご雛へつれて行き
- 傀儡師けだもの一つ交せて見せ
- 大釜へすつほりはまる鍋いかけ
- 直が出來てたが屋何所へか持つて行き
- 借著の合羽ぶちころし尻を喰ひ
- おてんばに構ひなさんなご轉婆いひ
- 大道でみやくを見て居る小兒いしや
- 辻番にたまく若い骨がらみ

- 河童の屁すかしても音がする
- 茶碗酒下戸も用ゐる旅のあぢ
- 玉簾のうちで太夫はまッ裸體
- 牡丹餅をすりこ木で突く恥かしさ
- 極樂へ墮ちる地獄の玉の輿
- 好く流行る醫者は藥も風引かず
- 死すべき時に死なざれば日本ぶし
- 是は百兩ミ申すむすめに候
- ひめのりをさし身につくる番太郎
- 御近所へお世話をかけて鯁をやめ

- 股間をのけに刺される麥の中
- 仕合せは持ッたがやまひ斗りなり
- 生若いに炬燵を出ろミ叱られる
- 下女あくび口を明けるほぎ鼻は無し
- 屁の論でよめ一生の意地を出し
- はづかしさ悔しさよめの無實の屁
- 土器ミ茄すびよる湯に誘ひあひ
- かた揚をおろせば前がほころびる
- 戴いて飛車をこられた口惜しさ
- 下手將棊もろ手を組ンで休ンで居

欠

欠

- 煮うり屋の柱は馬に喰はれけり
- 三神はなぶるこよみし御すがた
- たいこもち宗旨ばかりは負けて居ず
- 若後家の剃りたいなごゝむごがらせ
- 初ものが来るこ持佛がちんこ鳴り
- 四辻へ来るこ追手の氣がふえる
- 返事かく筆の軸にて王を逃げ
- そこら中蓋を明けく亭主ぶり
- くらやみで晝飯を喰ふ漆かき
- 男ならずぐに汲まうに水かゞみ

うき世の裏表

- 母親の或はおごし手を合はせ
- 籠かけに四五間先で犬がじやれ
- 母が名は親仁の腕に萎びて居
- 方丈は雑藏へ来ていちやつかれ
- 五右衛門は生煮えの時一首詠み
- 見世先へ出ては亭主を憎がらせ
- 猿轡和尚をはじめたてまつり
- 糸を巻くやうに花嫁餅を喰ひ
- かくり人疱瘡をした餅をくひ
- 子心に早く寝たがる寶船

六三

- 船頭の居所にこまる寶船
- 年禮は受けて今のは誰だった
- 正月は隣りからでもしやちこぼり
- 羽子板を預けて帯をしめなほし
- 羽子板を投げて女房禮を受け
- かりた子を又貸にして嫁は羽根
- 松の内下女ぬったこはく
- 歌かるた膝の下からほこぎす
- 歌かるた人こいふ字に手が五つ
- 萬歳がほしをさしたる夫婦中

- 出代りの乳母は寝顔に暇乞ひ
- 風の來るたびに隣の櫛を賞め
- 据風呂に下女が居る内春になり
- 姫籠もうす化粧する春の雪
- 白魚の眼は楊貴妃の手のほくろ
- 薪程乳母の里から桃の花
- 内氣には似す内裏をば小さがり
- 富士山をかくす許りが春のきす
- 船べりで風をつぶすうらくかさ
- 同じくを四五人で持つへボ角力

- すしや釋るさ箱のある下手のつり
- 初松魚女房頭も喰ふ氣なり
- 初鯉家内残らず見たばかり
- 鶴程に騒ぐを聞けば毛蟲なり
- 竹の子は盗まれてから番がつき
- きやツこいふ娘のあみを蛙飛び
- 道問へば一度に動く田植笠
- 我尻はいはず盥をちひさがり
- 風呂敷をかぶったあした蚊帳を出し
- 乳母が尻ほくぼり兼ねる枕蚊帳

- 物さしで晝寢の蠅を追ってやり
- うたゝねの書物は風が練って居る
- うたゝねをくまざるやうに掃いて行き
- よッ程の間かき晝寢は目を擦り
- 寢て居ても團扇の動く親心
- 面白がって子のくぐる土用干
- 蟲干に小袖著たがる頑是なき
- 暑氣見舞枕三團扇持つて逃げ
- 暑いここ隣には未だ話し聲
- 船の子へ蟹投けてやる蜆取り

○きつい降り俵が馬を引いて行き
 ○夕立や法華かけこむ阿彌陀堂
 ○夕立や上戸かけこむしるこ餅
 ○夕立のたんびに仁者貸しなくし
 ○たゝまれた蚊は雷に甦り
 ○風なりに羽織をたゝむ屋形船
 ○風呂敷を解くこかけ出す真桑瓜
 ○西瓜賣首實檢のやうに見せ
 ○突きあたり何かさゝやき蟻わかれ
 ○盆棚はみんな畑の月足らず

○逃げ足で嫁の出で来る門涼み
 ○夕涼みづしりこ俵落す音
 ○風に笠ごられぬやうに口をあき
 ○押へればすゝき離せばきりぐす
 ○来る人を蟲が知らせる草の庵
 ○残る蚊のはかなく顔へ行き當り
 ○足袋の紐結べば蜜柑ころけ落ち
 ○赤蜻蛉空を流るゝ龍田川
 ○引き抜いた大根で道を教へられ
 ○片棒をかつぐ前夜のふぐ仲間

○腹汁をくはぬたはけに食ふたはけ
 ○ふし穴を座頭の見出す寒いここ
 ○密談の火鉢二人でいぢり消し
 ○手の甲へ餅を受け取る煤拂ひ
 ○かけて来た程に娘の用は無し
 ○能い娘母も惚れ人の數に入り
 ○洗ひ髪握ッて袂見てもらひ
 ○よめり前母の白髪も抜きへらし
 ○結納をおツかなさうに覗いて見
 ○母が付かないさ貰ひ人だらけなり

○引越の後から娘猫を抱き
 ○髪がよく出来て襷をやツこ越し
 ○口をすくさせて花嫁腰をかけ
 ○笑ふたび嫁手の甲を口にあて
 ○看經がすむ居すまひ嫁直し
 ○覗かれて顔を突ッ込む耳だらひ
 ○燈明を嫁は二人で消しにゆき
 ○湯殿から忘れた時分嫁は出る
 ○借りた子に乳をさがされ縮むなり
 ○もツ寝て御坐れに嫁は消えたがり

- 坐すわつて、嫁よめは著あ更かへてすつこ立たち
- 兄あに嫁よめも芝しほ居い座ざひはぐルになり
- 二三丁ちやうで出でてから夫ふう婦ふつれになり
- 新しん世せ帶たい強こほ飯めしができかゆができ
- 添そ乳ぢしてた柵さしにい鱒いわしがこざりやす
- 狀じやう差さへさ々々ぬが女に房ぼう氣きにくはず
- 家や賃ちんよりた高かいあ染せん賃ちんきる女に房ぼう
- 見みこもなさ亭てい主しゆかきのけ罷まり出る
- 後のちぞひはこはぐ一つ縫ぬひなほし
- 風かぜ吹ふかばぎころか女に房ぼう嵐あらしなり

- 蚊かの喰つたまでも怨の數にいれ
- 去さつた明あ日す物ものを探すにかまつて居
- ふだん著で來て媒酌う人を驚おかせ
- 行あん燈せんに去つた女に房ぼうの針の痕
- よくしめて寢やれ後ご家けのあぢきなさ
- 一ぶ分ぶのび二ぶ分ぶのび後ご家けのみだれがみ
- 寺てら詣まりしたし嫁よめをもいびりたし
- 四に五ご日にちは嫁がくを吹聴きし
- 吐しらずに隣りの嫁を譽めて置おき
- 今いま死しねば嫁よめがうかぶこ薬取り

- それ許かり著て出やるのこもう虐いめ
- 下げ女ごいびり況や嫁においてをや
- 六ろく阿あ彌み陀だ嫁よめの噂のすてころ
- 憎にくい腹から可愛い孫まごが出來
- 法はふ事じから初めて泊とまるさこの親
- さうであるさうであらうこ里さの母
- 是こればかり著て來やるのこ里さの母
- 下げ女ごを差しおいて娘むすめに茶を出させ
- 衣い類るいまでまめでるかこ母はの文
- うた々ねの團扇うちの風が母の恩

- 添そ乳ぢしてつい洗濯たくが夢になり
- よく寢ねれば寢ねるこて覗く枕蚊が帳
- 男おとこの子裸はだかにするこ捉つかまらず
- 拍ひやう子し木ぎで捨子すての股をあけて見みる
- 今いま捨すてる子こにありたけの乳ちを呑せ
- ひろはる々親はやみから手を合はせ
- 吐しられる度に息子の年が知れ
- 親おやの脛かじる息子の齒の白さ
- 孝かう行かうのしたい時分に親はなし
- むりな異見けんは魂を入れかへろ

- 水加減亭主産所へきくくる
- 女房を吐り過して飯を焚き
- 御隠居は杖の頭へ手をかさね
- 九十九で死んで一年惜しがられ
- 田舎婿袴でしぼりからけられ
- 用向の隣へこまる一人者
- 一人者胴震ひする飯を喰ひ
- ほころびミ子を取りかへる獨者
- 捨て、おく椀が世に出る居候
- 居候三杯目にはそツミ出し

- 居候嵐の屋根を這ひ廻る
- 錢までがたばこの中に居候
- 叱られた下女膳立の賑かさ
- 下女の手でばりく、疊む縞子の帯
- 田舎下女イツそ真綿ご掴み合ひ
- 寝忘れた下女は矢鱈に薪をくべ
- 下女の文書いては喰って終ふ也
- 自劣たいお子だ守は二度ゆすり
- 湯治から歸って悪い藝が殖え
- 高輪へ出るこ忘れた事ばかり

- 近道をなまものじりで山をこし
- からかつた上で三組貸してやり
- 媒酌人は嘘八百を並べ立て
- 四百づゝ、兩方へうる仲人口
- 伏勢のあふれはノロリく来る
- 降参がすむこ一度にひだるがり
- 病人のみな見て置く醫者の癖
- 臺所へ追手のかゝる病み上り
- 看病が美しいので匙をなけ
- 碁敵は憎さも憎しなつかし

- 碁會所ミ醫者へミ迎ひ二人出し
- 美しい手のかけ廻る琴の上
- 望まれて嫁一本はめ二本はめ
- 四五人の親ミは見えぬ舞の袖
- 三味線の撥を欠伸のふたにして
- 譽められる所で切れる三の糸
- 河東節親類だけに二段き
- 顔中へ替女の子乳をあてがはれ
- 大根種ありは村での能い手なり
- 久しぶりまづ兩方で反りかへり

- 氣があれば目も口程にものをいひ
- かたみ分け怨みつらみの初なり
- なま長い経であつたさ土手で云ひ
- 無い筈はないさ跡から倉へ行き
- 麥飯の味も忘れた長い公事
- 虎の鳴聲を聞かれて儒者困り
- 越後屋に小半年るる風の利
- 船頭もあこの婆は義理で抱き
- 井戸替は深さを横に見せるなり
- 明日でも刺ツてくれろさ飛車が成り

- 料理人氣のへる程に屑を出し
- 鹽梅を家中させる下手料理
- 重箱へおいしい聲がよりたかり
- 本降りになつて出て行く雨宿り
- 狐付き鼠さまでは望みかね
- わるい路手が板塀をあくるなり
- 提灯をのゝ字にまはす水溜り
- 我頬を撫でく刷毛を借りて行き
- 乗るもんぢやない馬場から跋出る
- 手紙には狸登には鯉をのせ

- もちツミで唐でうぶ湯を召す所
- 三郎は毛蟲を筆ではらひのけ
- その暗さ早太櫻につツかゝり
- 北野では義理づめで鳴く時鳥
- つれますかなさゝ女王そばへより
- 孔明をもう二三册生したい
- 寢言なき云ひはせぬかさ盧生云ひ
- こりはてゝ函谷關に時計出来
- 七人は藪蚊を追ふにかゝつて居
- 片隅へ朝寢の旦那はきのこし

- あツばれな手で賣店さ書いてはり
- 賣店さ唐様でかく三代目
- 丸薬の膝をころけるその早さ
- ものさしてたらぬくさ叩いて居
- ひきがへるかけものを見る姿なり
- 風車外山の風のふきあまり
- 捨てる藝初める藝にうやまはれ
- 只も行かれぬが不沙汰のなり初め
- 挨拶のたびに手拭肩をかへ
- 息が切れますさ鋸かしてやり

○首縊り面當にこはたはけ者
 ○封じ目を柱でつける急な用
 ○萬能に達し取り得のない男
 ○振袖は言ひぞこなひの蓋になり
 ○國の母生れた文を抱きあるき
 ○傘を栗で返す律義者
 ○火もらひの吹きく人に突き當る
 ○約束を違へぬ紺屋あはれなり

○關取の乳のあたりに人だから
 ○小便に起きて夜業をねめ廻し
 ○鳴子曳き子の愛想に一つひき
 ○相惚れは顔へ格子の痕が付き
 ○辨天をのけるこ後は不具なり
 ○新世帯何をやっても嬉しがり
 ○これ小判たった一晚居てくれろ

浪六全集

第八編終

浪六全集第八編

定價金壹圓拾錢

大正四年一月二日印刷
大正四年一月五日發行

著者 村上信

發行者 加島虎吉

印刷者 神谷次郎



發兌
 東京市日本橋區
 本石町三丁目
 電話 混花 一九四九番
 振替貯金口座東京 一九八四二番
 至誠堂書店
 至誠堂小賣部

傳叙自生先六浪書奇大一

浪六先生著

▲口繪著者自畫自書コロタイプ版珍品十數葉

我五十年

四六版特製箱入美裝
紙數 四百六十頁餘
定價 金一圓五十錢
郵送料 金十錢

事實は小説よりも奇なりと云ふ語を始めて浪六先生の『我五十年』に證明せらる、生れて今日に至るまで人生の波瀾曲折を極めし先生の一記を最も大膽に最も露骨に告白せるもの、机上の筆を以て書きしにあらず、現在の身を以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なるもの、自叙傳にあらず、其の一例を擧ぐれば満天下の讀書界を風靡せし五人男の如きも各その本名と實際の事實を現はせり、全編いやしくも一字一點の架空文字なし、多年浪六先生の小説を讀みしもの必ず本書を讀まざるべからず、

浪六全集 縮刷

第九編目次 ◎男 山編 ◎男 後 正編 ◎同 一 門 ◎高倉 長右衛門編 ◎同 後 編	第八編 居家世正 川柳 學問人 自 編續 表裏のよきう	第七編目次 ◎最後岡崎俊平編 ◎同 後 左衛門 ◎魚屋 助左衛門 ◎呂宋 坊左衛門 ◎古武 質市 ◎武士 氣質	第六編目次 ◎鬼あざみ ◎やまと心 ◎日本武士 ◎金剛 編 ◎同 後 編	第一編目次 ◎當世五人男編 ◎同 後 健編 ◎同 後 健編 ◎同 後 健編 ◎同 後 健編 ◎同 後 健編	第二編目次 ◎上田 力編 ◎同 後 幸編 ◎同 後 幸編 ◎同 後 幸編 ◎同 後 幸編	第三編目次 ◎川上 三吉編 ◎同 後 三吉編 ◎同 後 三吉編 ◎同 後 三吉編 ◎同 後 三吉編	第四編 屋長軒八 前編	第五編 屋長軒八 後編
--	--------------------------------------	---	---	---	---	--	----------------	----------------

各編收むる所悉く是れ浪六先生が傑作中の傑作として天下の讀書界を風靡したるもの装幀の美は机上を飾るべく携帶の便は旅行に伴ふべし幾回之を讀むも飽く事なからざるべし内容の豊富と價格の至廉亦他に比類なかるべし

▲袖珍特製天金
▲箱入願美裝
▲印刷鮮明
▲携帶至便

第一・二・三・六・七・九
定價各冊壹圓卅錢
第四・八編
定價各冊壹圓拾錢
郵稅各內地八錢 清鮮廿錢

福本日南先生新著

最新刊

大勢史眼

菊判特製全一冊
定價金壹圓廿錢
郵税内地金八錢

著者の題言に曰く「歐洲大亂の遠因は伯林條約の翌日に發し、其近因は奧國のボスニア、ヘルゼゴヴィナ併合の當日に在り。カイゼル野心の意圖範圍は何處に在る。英露佛の三國協約と及其聯合運動は如何にして促成せられたる。伊國は何が故に中立したる。日本は何が故に戦争に参加せざる可からざる。是等を詳悉せざれば、戦争の終結と未來の大勢及國策を談するに足らず。然も之を詳悉せんと欲すれば、彪然たる近世外交史中に没頭せざる可からず。斯くの如きは世務に俯仰する士人の能くする所に非ず。我れ之を憾み、數十年を貫串し、務めて大勢の遷移する所を綜攬し、世務家就中政事家の參稽に資せんと欲す」と。人若し之を繙かば、坤輿を掌上に旋らし、大勢を眼下に指點す可し。

文章の精粹此一書に鍾まらる

大町桂月先生著

▲文章鍊磨の大寶典

桂月文選

袖珍特製天金美裝
紙數壹千頁全一冊
定價金一圓三十錢
郵税金八錢

天下苟くも文字を知れる人にして知らざるは無き文豪大町桂月先生時流に高く一頭地を抜いて文壇に闊歩すること既に廿餘年文を撰す數千萬章著書等身も嘗ならず今や先生自ら其中より最も會心の傑作一百四十餘篇を抜きて紀行・敘事・抒情・議論・書簡・雜の六門に分つ先生が半生の心血この一書に凝れり絢爛花の如きあり凜烈秋霜の如きあり豪放に洒脱に雍容に悲壯に剛柔を兼ね諸體を包含し筆力縱橫氣韻躍動實に一代の壯觀を極む大正の文壇本書出で始めて光彩を生ず天下好文の士請ふ速に一本を座右に具へ給へ

大正著名文庫

第三編

杉村楚人冠先生著

▲口繪 六大書伯

六葉

へちまのかは

本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が廿餘年の心血を凝がれたる力作なり。先生は文才氣煥發行く處として可ならざるなく、筆力切よく、個性よく發揮せられたるもの。然も行文流暢趣味深甚、蓋し本書の如く、個性よく發揮せられたるもの。天下其の比を見ず、是れ先生一代の傑作にして、近來稀有の快著。

世評一斑

時事新報曰く、著者二十餘年の波瀾ある生活の叙述せしもの筆や、斷じて他の模倣追隨を許さざるものあり、獨得の調子と奇想天外の落想とは、必ず讀者を魅し去つて已まざるべし。
萬朝報曰く、リアンの學生、講師、官吏新聞記者、渡歐等約二十年間に亘る著者の實生活を抽出したるもの著想奇警加ふ。
日本曰く、著者生來の機智と英文脈得べく、何れも棄て難き小品計りである。好評出。
「兎糞錄」等に對せしむべし。
「趣味廣き楚人冠獨得の好著といふべし。く、以て妙筆として「みづ」のたはこと」
「兎糞錄」等に對せしむべし。
「趣味廣き楚人冠獨得の好著といふべし。く、以て妙筆として「みづ」のたはこと」

第四編

村上浪六先生著

▲口繪及裝幀

著者自畫自書

罵倒録

紙四六判 特製美本
定價金壹圓貳拾錢
支那朝鮮各二十錢

大正著名文庫

世評一斑

●實業之世界曰く、本書は大正著名文庫の第四編であつて、其先出姉妹篇として既に和垣博士の兎糞錄、大町桂月氏の人の運、杉村楚人冠氏の「へちまのかは」等を出して居る。……
▲其雄健にして圓轉滑脱せる工合などは、凡筆とは決して云へない。……
▲本書は氏一流の筆鋒を鋭くして、片端から小氣味よく罵倒した社會觀人生觀、世觀で、其の世道人心を縦論横議せる所、キビしく、として痛快を極めて居る。……
▲精勵刻苦の蟻が午睡を食つて居る人を罵倒する、春麗かな日、翻讀として戯む。
●二六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想録、滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく、下の珍書。
●六六新聞曰く、浪六先生曰く、あまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど、實際是れが我輩近來に於ける快文字なりと！

新日本外史

大町桂月先生譯評

全貳拾貳卷縮刷全壹册 紙數壹千貳百頁

袖珍特製美本 特價金壹圓貳拾錢
定價金壹圓五十錢 小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力難麗古英雄一々紙表に生動の干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西書類の散文小敘詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之紙の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯く永遠に復すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふることを極む條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自ら寶を捨つる勿れ

新文章軌範

友田宜剛先生評

全七卷縮刷全壹册 紙數壹千壹百頁

袖珍總クローズ 正價金壹圓拾錢
天金箱入特製 小包料金八錢

文章は經國の大業のク五號活字を用ふ更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文不朽の盛事の本書は最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範として精神の養作の大寶典見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと

濱野知三郎先生註解

新孟子附索引

全四十卷縮刷 全壹册 紙數八頁 稅銀八錢

文章は奔放自由を極め英氣の潑瀾たる比喻の巧に豊富 孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直に其全文を求め得るの便に供したり其の和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇抜なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位置に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切

山陽獨得の歴史詩尊王の愛國の精神活躍す!

新日本樂府

大町桂月先生譯評

全壹册 紙數三百五十頁

袖珍總クローズ 正價金五拾錢
天金箱入特製 郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯され今また韓山陽の詠史日本樂府を譯するのみならず之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗々誦すべく尊王の詩人として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

新譯漢文叢書第五編

史界大觀

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を説き、後に日本政記を著して朝廷施政の綱目を明にせり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刪して止まざりしものにして、翁が大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして、實に史界の一大憾事なり。茲に翁の遺稿を採り、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し、大町桂月先生之を翻譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目に一新す。日本國民必ず一本を備へよ。

新譯 日本政記

袖珍天金 定價金八拾錢
箱入特製 郵税金八錢

大町桂月先生譯評

全八册縮刷全壹册 紙數六百二十餘頁

新譯漢文叢書第六編

新譯 十八史略

支那五千年興亡八十餘朝此間治亂成敗の跡漢滿民族の起伏消長を審にせる者を十八史略とす。本書は先生が特に意を用ゐて現代國語の文法に循從し漢文に特殊なる語勢の緩急を併せ移し難解の字には註解を施して叮嚀懇切を極む卷末には便利なる新式索引を添え隨所に挿入せし數百條の批評は奇警峭拔其の史實と相俟つて痛快を極む。

久保天隨先生譯評

全七册縮刷全壹册 紙數七百頁

袖珍總クローズ 正價金八拾錢
天金箱入美本 郵税金八錢

新譯漢文叢書第七編

新譯 續文章軌範

續文章軌範は正文文章軌範と相待つて古今作文の雙璧古人が心血を凝して作り文に志す者は必ず之を座右に致して朝夕に師とし友とすべし當代の文藝教授の泰斗友田先生刻苦研鑽多年の螢雪を積んで茲に之を完全なる明治の作文範模化せらる。

長特の書本

漢文讀方通弊たる文法の誤りに深く注意し本文は新式ゴチック活字振假名附にして難解の字には懇切なる解釋を施し各文の始めには作者略傳を附し篇末には文法と總評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を教へ上欄に原文を掲げて對讀に便し且之にも古賢の興味深き評語を網羅附記して讀者の趣味を喚起せしむ。

友田宜剛先生譯解

全七册縮刷全壹册 紙數壹千頁

袖珍總クローズ 正價金壹圓
天金箱入美本 郵税金八錢

新譯漢文叢書第八編

大町桂月先生譯評 新譯 國史略

全袖珍壹圓 縮製拾圓 刷紙拾圓 全九數錢 壹百餘頁 稅八錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の貴き所以を知らず三千年金甌無缺の歴史の實質を知らず人心輕佻となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとせるは今の世の大患なり世の歴史教科書は唯歴史の骨組のみありて肉なく血なし歴史教育の宜しきを得ざることを其大原因ならんばあらず大町桂月先生茲に慨する所あり先に日本外史日本樂府日本政記を譯され今又國史略を譯する國史畧は古來の諸國史の粹を抜き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を開闢に創めて篇を樂樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とすに足る廿年前迄は戸々にて誦せられたるりき然るに漢學教育衰へて此名著も空しく閑却されんとす今大町先生之を譯し之を解し之を評して有益なる貴重なる國史略に復活す。

大町桂月先生校訂解題(學生文)史傳・修養・教訓・文藝・隨筆の古典名著
袖珍特製頗美本 各册金參拾錢 郵稅各金四錢 五册以上壹割引 郵稅不用

新訂南朝史傳

全壹册
神皇正統記吉野拾遺櫻雲記を収む皇統の由りて來る處を論じ國家の治亂興亡を説き南朝の正統を明かにし筆致堂々として正大也

新訂源平盛衰記

全五册
文章雄健にして而も事實の精細を極め源平二氏が成敗の跡歴然として眼前に見るが如く興味亦た津々たり

新訂太平記

全五册
柄公誠忠の輝ける歴史は國史中の一異彩也當時の事蹟を總括せるは本書の外に求む可らず

新訂曾我物語

全壹册
其の文章の流麗なる其描寫の委曲を盡せる實に七百年前に於ける富士山麓の復讐を目前に夢見せしむ

新訂常山紀談

全參册
名将勇士の逸話逸事を蒐録し戰國時代の武士が互に節を慎しみ義を守りし武士道の典型を示せし常山慨世の名著也

新訂先哲叢談

全壹册
江戸時代前半の學者七十二人の人物性行を記せし漢文を平易に假名交りに譯せるもの興味津々として盡きず

新訂心學道話

全壹册
平易にしてしかも心理に透徹し笑言戯語の中に無上の教訓を含む修身齊家精神修養の良書

新訂益軒十訓

全參册
人倫五常の大意を説き父母を養ふに其の志と體との二あるを示し義理と利養との輕重を訓し堪忍制欲の要勤慎敬儉の徳を述べ

新訂日本外史

全參册
原文の妙りを知らんとする者は本書を讀め漢文に句讀訓點送り假名を附して初學者に讀み易からしむ校訂の嚴密なる印刷の精麗なる實に本書の誇とする所なり

新訂義經の記

全壹册
悲壯又慘憺英雄の末路人をして卒讀に堪へざらしむ吉野山の雪中奮闘の條の如きは世に有數の快文字にして史跡の壯觀なり安宅の關の條殊に慘憺を極む

新訂新謡曲全集

全參册
創作時代の謡曲を基礎とし之に各流謡方の相違せるものは一々脚註し文章通じ難き者は細かに其出典を究めて考證解説せり謡曲文學を味はんと欲する者は非本書に依らざる可らず

新訂狂言記

全壹册
狂言中の傑作八十番を選ぶ日本國民は快潤也無邪氣也天真爛漫也故に能く笑ふ狂言記は其の笑の發揮せられたる一文藝也一藝術也快男子は狂言に對して大いに笑はん哉

新訂一休諸國物語

全壹册
機智滑稽の裡に萬斛の涙を含む所之れ一休獨得の神秘也本書は彼が諸國雲遊物語の粹を集めたるものにして内容の豊富なる從來其例を見ざる所なり

新訂太閤記

全五册
大師は弘法の専有となり太閤は秀吉の専有となる秀吉は實に我國史上に一頭地を抜きたる大陸的英雄也競争激烈なる現代に活躍する者は戰國時代の優勝者に學ぶ所あるべし

新訂百人一首一夕話

全壹册
かるたは日本特有の國民的遊戯也敏捷勇敢なる國民性を發揮す百人一首の注解書は多けれど能く歌を解き兼ねて作者に關する面白き材料を集めたるは本書の右に出づる者なし附録として「歌がるた必勝法」を添へたり新年の閑日月には國民一般必讀の良書也

新訂西遊記

全貳册
想像の奇著想の怪實に天外より來る皆一讀壯絶快絶卷を措く能はざらしむ

法學博士 和田垣謙三先生著
青 年 諸 君
 (改訂増補貳拾壹版)

國民新聞評、著者の滑稽と
 妙文とは世之を知る、
 識の該博にして論旨の意
 に出づる處殆んど敵手無
 奇書のひとつ云ふに憚らず

四六版 特製
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

帝國大學教授 和田垣謙三先生著
世界商業史要

東京朝日評、太古三千載に
 互れる世界商業の盛衰を縱
 談し盡せり：博士の蘊蓄を傾
 讀まし盡せり：一般學生の傾

菊版總クローズ製
 定價金 壹圓廿錢
 郵税金 拾貳錢

和 田 垣 博 士 戲 著 川 村 畫 伯 艸 畫
處 世 餅

正月の芽出度餅に無限の寓
 意を托して人生最大の氣持
 心持を託して人生最大の氣持
 諷刺を酒脱論せしもの諧
 調とに富める古今獨歩也

袖珍美本全一册
 定價金 貳拾五錢
 郵税金 四錢

皇孫殿下覽の光榮を賜ふ
 和 田 垣 博 士 中 谷 無 涯 兩 先 生 著 (文 部 省 檢 定 済)
戊 申 詔 書 奉 體 歌
 東 儀 鐵 笛 先 生 東 京 音 樂 會 作 曲

戊申詔書の聖旨を奉體して
 解し易く曲面白く朝夕吟誦
 せば畏き大御心の程推し奉
 べられて限りなき聖恩に浴す
 べく萬民必讀の國民的唱歌

全一册
 定價金 五錢
 郵税金 貳錢

浪六先生著

現代男女の戦ひ
 口繪實況寫真コロタイプ版

誠實の和陸は戦ひの後にあり神聖の
 戀愛は男女衝突の後に生ず
 男女あらゆる階級の衝突男女あらゆる
 男女の思想の衝突是を讀まざる者今日の
 男女にあらず

菊判美本三百頁
 定價金 九拾五錢
 郵税金 八錢

浪六先生著

現代男女の戦ひ續
 裝幀川村畫伯浪六先生各苦心の大意匠

社會あらゆる階級を網羅せし男女の
 戦ひいよ／＼白兵戦に入る男女兩性
 を赤裸々に剝出したる人生の裏面史
 なり

菊判美本三百頁
 定價金 九拾五錢
 郵税金 八錢

浪六先生著

黒 雲
 口繪 北澤樂天畫伯

女主人公は嬋天下の標本也此間に細
 君の鼻息を伺ふ牧野貞一と之を見兼
 ねし磊落豪放の田村剛三とを排し波
 瀾曲折よく強弱醜美の對照を描く

菊判美裝三百頁
 定價金 九拾五錢
 郵税金 八錢

浪六先生著

雪 達 摩
 口繪清方畫伯木版廿五度刷

此首伊達には所持致さず入用次第賣
 渡申候云々と暗き出せし快男子の面
 目は著者獨得の痛快なる筆によりて
 遺憾なく現る是れ小説よりも奇な
 る事實譚

菊判美裝三百六十頁
 定價金 壹圓廿錢
 郵税金 拾貳錢

東京小兒科
病院々々長
醫學博士 瀨川昌耆先生述

最新小兒病手當法

家庭必備
の良書

博士序に曰く「小兒の疾患は急激に發し易く病症亦變化し易し而して最初其の應急手當の適不適は延いて以て病の輕重經過并に快復期等に迥はす影響甚大なリとす去れば母の親として愛兒を撫育せらるるや必ず先づ一通りの小兒病手當法を心得置かざるべからず」と本書は斯道の大家瀨川博士が多年幾多の實驗とあらゆる小兒病症に就て日常心得べき手當法を極く分り易く素人にも行ひ得るやうに説明してあります愛兒を持つ家庭には是非本書を御薦め致します

鈴木寛一先生新著

國民商業讀本

全二冊
前編定價金參拾八錢
後編定價金四拾錢

日本は世界の日本なり商業には國境なし今後の新商人は常に世界を了解せざるべからず從來此種の書は發行せられたるもの尠からずと雖も意を此點に集中したるはなし本書は斯道に經驗深き鈴木先生が嘗て商業教育界の書宿神戶高等商業學校校長水島鐵也先生の嚴密なる校訂を経公にせられたる商業讀本を更に時勢の要求に従ひ改訂執筆せられたるものなり上梓するや或る米商業界の最新知識を捉へ來りて内容を整へ平易に敘述せられたるものなり上梓するや或る商業界に入らんとする青年は座右に具へて指針とし日新の活知識を享受せらるべし

大町桂月先生新著

箱根山

三五形五三美
製特形五三美
册一全本

夏期第一最適の良書

日本第一の温泉場と云へば何人も先づ指を箱根山に屈すべし又日本第一の自然的大公園と云へば何人も先づ指を箱根山に屈すべし而して日本第一の紀行文家と云へば何人も先づ指を大町桂月先生に屈すべし先生箱根山に遊ぶ事前後數十回蘆湖を中心とせる七八里四方の大山舊き七湯新しき七湯は言ふも更なり熱海湯河原、伊豆山諸温泉のある處二子駒嶽金時明神明星三國鞍掛日金石橋石垣神山諸峰のある處所謂八里の古道の通ずる處箱根三島伊豆山三權現道了早雲等古祠各寺のある處先生の足跡到らぬ限なく其獨得の紀行文に案内記を兼ねて雲烟紙上に浮動し一讀人をして神遊かむ殊に里程旅費宿料温泉の効能等最新の調査に係り詳記して漏らさず装幀の堅牢にして輕便なる亦破天荒なり

避暑温泉の最好案内書

先哲名著の一大寶庫

大町桂月先生先校訂解題

學生成文庫

(全四十五卷)
(逐次刊行)

(特製美本)
(舶來紙刷)

袖珍總一冊 スーロク 定價各冊金十三錢 郵稅各四錢

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
義經	先哲叢談	益軒十訓	日本外史	常山紀談	心學道話	太平記	源平盛衰記	西遊記	會我物語	謠曲全集	益軒十訓	日本外史	南朝史傳
全	全	中	中	上	全	壹	壹	上	全	上	上	上	全
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
經	禪學名著集	續心學道話	日本外史	大岡政談	太閤記	狂言記	百人一首一夕話	西遊記	謠曲全集	源平盛衰記	益軒十訓	常山紀談	一休諸國物語
全	全	全	下	上	壹	全	全	下	中	貳	下	中	全
42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
着	太平	太平	太平	太平	太平	太平	太平	源平盛衰記	太平	源平盛衰記	太閤	源平盛衰記	常山紀談
手	平	平	平	平	平	平	平	閣	平	源平盛衰記	閣	源平盛衰記	山紀談
中	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	下
終	終	終	終	終	終	終	終	終	終	終	終	終	終

內容

學生及讀書家一般の讀物として史傳、繪卷、教訓、文藝、隨筆等の古典的名著を網羅す

鮮印

校訂

大町桂月先生は自ら全卷を選擇し、解題し校訂して多趣多益也

裝幀

東京石本町三丁目 區橋本 至誠堂 電話本局 三六六四 六六四七 六六四七 發兌

71
489

終

